
赤と青の神話 三章

深江 碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤と青の神話 二章

【Zマーク】

Z2311Z

【作者名】

深江 碧

【あらすじ】

意識を取り戻したクロフは、間もなくディリーラが処刑されることを知る。何とか処刑を止めさせようとクロフは躍起になるが、それもかなわない。そこでクロフはディリーラの手をとつて、牢屋から抜け出そうとする。

やつと三章です。ようやく半分くらいでしょうか。稚拙なところは多々ありますが、少しでも楽しんでもらえたら幸いです。

救いの手①

三章 救いの手

クロフが床から起きられたのは、それから二日後のことだった。

女神官とフイエルナ姫に交代で看病され、クロフはみるみる氣力を取り戻していった。

老薬師の目を盗み部屋から抜け出し、クロフが真っ先に向かつたのはディリーアのいる地下牢だった。

牢に来たクロフを見て、ディリーアは不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「何の用だ」

ディリーアはクロフが以前牢を訪れたときと同じように、冷たくあしらつ。

「お礼を言つておきたくて」

クロフは苦笑いを浮かべ、ディリーアの鋭い瞳を受け流す。

「あなたが月の神の使者を追い払い、ぼくを助けてくれたのでしょうか？」 ありがとうござります

「別に」

ディリーアはつまらなさそうに吐き捨てる。

「ありがとうございます」

クロフはもう一度繰り返す。

クロフはかつて湖でしていたように、取り留めのない話をし、ディリーアがそれに相槌を打つ。

牢を去る間際、ディリーアの青い瞳に悲しみが宿っていたのを、その時のクロフは気付かなかつた。

「正直、あの女の牢を見回るときは、いつも肝が冷やされます。自分もいつ呪いをかけられるかって」

地下牢の階段へ向かう途中、牢番は大きく息を吐き出した。遠くで水の流れる音と、囚人の叫びが辺りに木霊する。

「大変ですね」

クロフは何気なく答える。

「そうなんですよ。でも、これも明日までの辛抱です。明日の昼になれば、あの女は広場で処刑されるのですから」

クロフは足を止める。

「いま、何と？」

松明に照らされ、牢番の影がちらちらと揺れる。

牢番はクロフが後ろに付いてこないことに気が付くと、ゆっくりと振り返った。

救いの手2

「へ？ 何がです？」

「彼女が、明日には処刑されると」

牢番は何度も瞬きし、クロフの顔をまじまじと見つめる。

「もしかして、知らなかつたんですか？ いま城中、その話題で持ちきりですよ」

「詳しい話を聞かせてくれ」

牢番は腰に下げた牢の鍵束を揺らし、ためらいがちに話し出した。

部屋に戻つて来たクロフは、寝台のそばの椅子に座つている人影に気が付いた。

鮮やかな赤い服をまとい、フィエルナ姫はクロフに笑いかけた。

「お加減は、もうよろしいですか、クロフ様」

フィエルナ姫は柔らかな笑みを浮かべ、クロフを出迎えた。

「ええ、もう大丈夫です。ご心配お掛けしました。いつまでも寝台で横になつていては、体がなまってしまいます。たつた今、外の風に当たつてきたところです」

「そうですか。それは良かった」

フィエルナ姫は胸元に手を当てる。

クロフはしばしためらつた後、真剣な顔つきになる。

「あの、姫。少々お聞きしてもよろしいでしょうか？」

クロフはフィエルナ姫をじっと見つめる。

あまりに真剣な目差しで見つめられたため、フィエルナ姫は恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「わたしでお答えできることでしたら」

蚊の鳴くほどの小さな声で、フィエルナ姫は恥ずかしそうに答える。

「单刀直入に聞きます。彼女が、牢にいる魔女が、明日に処刑されるということを、姫はご存じですか？」

クロフは静かだが、怒りさえ感じられる声音で尋ねる。

「え、ええ」

フィエルナ姫は両手を胸の前で固く握りしめ、小さくうなずく。「では、ぼくが太陽の女神の神託を受け、彼女を探していたといふことも、姫はご存じなのですね？」

フィエルナ姫はわずかに身じろぎする。

「はい、神官様達に聞いて、存じております」

両手を胸の前で組み替え、フィエルナ姫は小さくうつむいた。

「知っていたのなら、どうしてぼくに彼女の処刑について教えてくださらなかつたのですか？　あなたが太陽の女神の神託のことを知つていたのなら、尙更です」

救いの手③

クロフは赤金色の瞳には、荒野を焼き尽くすほどいの激しい炎が渦巻いている。

「それは」

フィエルナ姫はうつむいたまま、クロフの目から視線をそらす。

「何をしている」

鋭い一言が部屋に響き、辺りは再び静まり返る。

クロフがそちらに視線を向けると、部屋の扉の前にロキウスが杖を手に立っている。

戸口に立つロキウスは、クロフとフィエルナ姫を順に見比べる。二人のいる方に早足で駆け寄り、ひたすら縮こまっているフィエルナ姫を見て取ると、射るような目付きでクロフをにらみつける。「文句なら、俺が聞こいつ。姫にハツ当たりするな」

フィエルナ姫は軽く会釈すると、戸口の方に小走りに駆けていった。

フィエルナ姫が扉の向こうに消えたのを確認して、ロキウスは切り出した。

「お前が魔女のことでの言い分があるのはわかる。だからあらかじめ、姫に話さないよう頼んでおいたのだ。本当ならば魔女の処刑が済むまで、お前をこの部屋から出さない約束だったのだが」

ロキウスは冷ややかな目差しでクロフを見つめる。

「わかつてているのか？ 彼女は太陽の女神の神託にある人だぞ。彼女を処刑したら、どんな神罰が下るか」

ロキウスはクロフの怒りをものともせず、氷のように冷たく言い放つ。

「だが、あの女は多くの人々を殺し、苦しめ、広大な土地を腐らせた魔女ではないか。そんな女に、太陽の女神の恩寵があるものか。それに処刑しようと命令したのは、おれ達神殿側の人間ではない。そ

れを決めたのは、ここに暮す國民達だ

クロフは愕然とした。

頭の片隅ではわかつてのことだったが、いざ実際に田の前で言わると、強い気持ちが揺らいだ。

クロフは唇をかみしめ、何も言わず部屋を走り出た。

クロフは廊下を走り、国王の部屋へと向かつ。

ディリーアの処刑をやめさせたい一心で、兵士が止めるのも聞かず、部屋へ飛び込んだ。

部屋には南の王と数名の家臣、周りを固める兵士達、そしてクロフの世話をしてくれた女神官がいた。

彼らは話を中断し、息を切らせ部屋に飛び込んできたクロフを一斉に見つめた。

「騒々しい。部屋で静養していたはずのお前が、どうしてこんなところにいる？」

一番奥の椅子に座っていた南の王があざけを当てる。
クロフは慌てて礼の姿勢を取る。

救いの手④

「突然の訪問、失礼いたします。しかし王様に急ぎお願いしたいことがあります。こうして参つた次第でござります」

周囲にいた家臣達が口々に叫ぶ。

「何と無礼な」

「こんな者の言うことなど、聞く必要はございません」

「さつさと部屋へ戻れ。我々は忙しいのだ」

家臣達を片手で制し、南の王は大きくうなづく。

「いいだろう。お前の言い分を聞こいつ。その願いとやらを申してみよ」

「ありがとうございます」

クロフは頭を低く垂れた。

「実は、明日の魔女の処刑の件でお願いがあつて参つたのです。明日の魔女の処刑は、取りやめていただけないでしょうか？」

周囲にいた家臣や兵士達がざわめいた。

女神官は冷淡な瞳でことの成り行きを見守つている。

「なぜだ？ お前も知つての通り、あの魔女が処刑されるのは当然の処罰だと思うが」

クロフは顔を上げ、赤金色の瞳で王をひたと見据える。

「はい、わたしもそれに異論はございません。しかしあの魔女は太陽の女神の神託に示された方。人の手で処刑をすれば、この地にどんな災いを招くかも知れません。そこでの魔女の処罰は、わたし達神殿に任せてもらえないでしょうか？」

南の王は傍らにいた女神官に手配せをする。

女神官はクロフの前に進み出た。

「今回の件は、神殿の大導師様にもご相談したのですが、大導師様はこちラで処罰するのが妥当であると判断されました。たつた今、早馬で報告が来たところです」

女神官は静かに言い放つ。

「しかし」

クロフはなおも食い下がる。

「しかし、それにしては処刑が早急すぎるのではないか？」
もつと詳しく罪状を調べる必要がある

「その必要はない」

家臣の一人が口を挟む。

「死んでいった者のためにも、農地を追われた農民のためにも、また

国民すべてのためにも。魔女の処刑は早急に執り行うべきだ」

別の家臣が後を続ける。

「民達の悲しみ、苦しみ、苦しみを取り除くためにも、魔女の処刑
は必要なのだ」

救いの手5

「処刑が執り行われて、初めて彼らの心は癒される」「年老いた家臣が白いひげをじょきながらつぶやく。

「他に言い分はあるか？」

南の王の重苦しい声が響く。

クロフは片膝を付いたまま、うつむき拳を握りしめた。

「ありません」

クロフはからうじて声を絞り出し、爪が手のひらに食い込むほど強く握りしめた。

「失礼しました」

吐き捨てるようにつぶやき、王に十分な礼も取らないまま、クロフはその部屋を後にした。

クロフは暗い気持ちのまま、廊下を歩いていた。

うつむき今にも倒れそうな青白い顔で歩いていたので、すれ違った人々は目を見張り、進んで声をかけようとする者はいなかつた。

「おい！」

行く手を阻むように腕が差し出され、クロフはぽんやりと顔を上げる。

目の前にはロキウスが不機嫌な顔で立ちはだかっている。

「突然部屋を飛び出したから、心配してきてみれば、案の定だな。あの魔女のことなら、もつ諦めろ。王に異議を申し立てても、今更判断は覆らない」

クロフは黙つてロキウスの脇をすり抜けた。

「あの女のことはもう忘れる。お前は神託の通りに行動した。今更お前を責める者などいない。太陽の女神様も、神託の通りに行動したお前をお許しになるはずだ」

「うるさい」

クロフは吐き捨てるようにつぶやく。

「神託、神託って、ぼくがそのためだけにここまで来たと思つていいのか？ 神殿でずっと一緒に育つてきたお前まで、ぼくがそれだけの理由でここまで来たと、本当に思つていいのか？」

クロフはロキウスをにらみつける。

その赤金色の瞳には、怒りとも諦めとも付かない感情が浮かんでいる。

「神殿にいた頃、ぼくがどんな気持ちでいたか、太陽の女神様の神託を受け、火の神の生まれ変わりとしての宿命を背負わされた子供がどんな気持ちでいたか、一緒にいたお前でさえ本当のところはわからなかつたというわけか」

ロキウスはクロフの静かな怒りに気圧され、わずかにたじろいだ。「神殿の中でも神々の声を聞き、人には見えないはずの使者の姿が見えることが出来る人間は数少ない。それに加え、他の生き物と話が出来、詩も唱えず神々の奇跡を自在に操ることが出来る者など、今では万に一人いるかどうかだ。それをどうだ、生まれながらに太陽の女神様の寵愛を受け、軽々と神々の奇跡が行える子供が平民にいる。果たして周りの人々はその子供をどう思うか。平民風情がと、気に入らない人間もいるだろ？」「うう」

クロフは深いため息を吐き出した。

「ぼくが子供だったからと言つて、神殿内の出来事を何も知らないと思っているのは間違いだ。ぼくは知つていて。それを巡り神殿内でどんな争いが起こり、どれほどの心ある無実の人間が罰されたかを」

クロフは悲しげに微笑み、ロキウスに背を向け歩き出した。

「動物や木々の言葉がわかると言つことは、人々の感情にことさら敏感ということなんだ」

それだけ言つと、クロフはロキウスを振り返らず、逃げるよつて早足で歩き去つた。

救いの手⑥

部屋に戻ってきたクロフは、寝台の上に座り炉ばたの炎を見つめてぼんやりとしていた。

頭に浮かぶのは今牢にいるディリーアのことばかりだつた。気が付けばふらふらと部屋を出て、地下牢の方へ歩いていた。クロフが地下牢にたどり着くと、牢番は牢の前にはいなかつた。階段から下りた突き当たり、牢番の詰め所で蜜酒を酌み交わしていた。

口々に明日の魔女の処刑を喜び、その声がクロフのいる階段のところまで聞こえてくる。

クロフは牢番の詰め所に顔を出さず、さつさと奥の牢屋へと歩いていった。

ディリーアのいる牢の前にたどり着いたクロフは、背を向けて石の床の上に横たわっている人影を見つけた。

クロフが声をかけようとためらつていううちに、人影がもそもそと動き起きあがつた。

「またお前か。まだわたしに何か用があるのか？」

ディリーアは眠りを邪魔されたためか、大きなあぐいをかみ殺す。

「ごめん」

クロフは素直に謝った。

「でも、今夜中に聞いておきたいことがあつたんだ」

「何だ？」

ディリーアは氣だるそうに石の上にあぐらをかく。

クロフは長い間ためらつてから、やっと口を開いた。

「あなたは、この牢から出たいと思わないのですか？」

クロフの問いに、ディリーアは首を傾げる。

「つまりその、あなたなら、水を自在に操るあんなすごい力を持っているのなら、逃げられるはずです。そうしないのはどうしてですか？」

ディリーアの虚ろだった青い瞳に生氣が戻ってきた。

「確かに前の言つとおり、牢を出よつて思えれば出られない」ともない

「では、どうして」

クロフの言葉は最後まで続かなかつた。

ディリーアの射るような鋭い瞳に、途中で遮られた。

「牢を出で、ここから逃げて、それでどうする？」

ディリーアの泉の底のような青い瞳には、有無を言わさぬ強い輝きが宿つている。

「わたしが牢を逃げ出すには、恐らく牢番を殺さなくてはならないだろう。手向かう兵士達も殺さなければならない。国民をすべて敵に回さなければならない。それでどうする？ この先どこへ逃げるのだ？」

「それは」

クロフには答えられなかつた。

何よりも、ディリーアの冷たく悲しげな瞳に射すくめられた。

「国民と神殿の人間を敵に回して、わたしにどうしろと言うのだ？ わたしが城に連れてこられてから、あの森も焼き払われたと聞く。一体わたしにどこへ行けと言うのだ？ わたしには帰る場所も、迎えてくれる家族も友人も、もう何も無いといつこの」
ディリーアはうなだれ、腕に顔を埋める。
クロフも沈痛な表情でうつむいた。

「でも」

絞り出すようにクロフは声を張り上げた。

「でも、逃げないと、あなたは明日の正午、広場で処刑されてしまう。それでもいいのですか？」

ディリーアは伏せていた顔を上げ、クロフを見上げる。

「知っていたや。そんなこと」

吐き捨てるよつよつぶやく。

「森にいたときから、お前に初めて会ったときから、いやその前からずっと、覚悟していたさ。何者ががわたしの命を奪うことか。いつかわたしがお前に殺される」とを」

「そんなことは…」

クロフは口^ノもつた。

ディリーアの言葉を否定するはずが、続く言葉が出てこない。「そんなことは無い、か？ そうだな、お前が直接手を下したわけではないからな。だが結果的には変わらない。お前が、神殿の人間が来たせいで、わたしは森から追い出され、森を焼かれ、今ここにいる」としている

クロフはうなだれたまま、黙つてディリーアの言葉を聞いていた。どういう言葉を並べても、ディリーアに詫びるとは出来ないと考えたからだ。

「まあ、仕方がない。これがわたしの招いた結果ならば、責め苦を負うのはわたし一人でいい。気楽なものぞ」

「ごめん」

クロフは鉄格子を両手でつかむ。

「本当に、ごめん」

クロフは石の床にひざまずき、深く頭を垂れる。

「気にするな。お前が気にしてどうにかなることでは無いのだ。これがわたしの運命だったのだ。お前が気に病む必要はない」

ディリーアはクロフの鉄格子をつかむ手に傷だらけの細い手でそつと触れる。

「わたしのことは忘れ、お前は神殿に戻れ。そしてお前の力を万民のために役立てろ。なあに、お前ならば良い神官になれるさ。わたしが保証する」

ディリーアの青い瞳が優しげに細められる。

クロフはその微笑みに目を奪われた。

それはクロフの中で強い意志の炎を新たに灯らせ、燃え上がらせた。

牢屋から戻ったクロフは、真っ先に女神官のいる部屋へと向かつた。

南の王との一件は、やはりクロフの中では納得できない点が多くつた。

ディリーアの処刑の話も含め、今一度理由を尋ねたいと思つたのだ。

「失礼します」

部屋に入ると、女神官が炉ばたの側の椅子に腰を下ろしていた。

炉の中の炎は赤々と燃え、火の粉を巻き上げている。

女神官はクロフの姿に気が付くと、ゆっくりと顔を上げた。

「やはり、来ましたね」

白い裾を揺らし、女神官は椅子から立ち上がった。

「明日の処刑の件で、考え直していただけないかと思いまして」

クロフは離れた場所から、小柄な女神官を見下ろした。

白い衣をまとった肩は細く、裾から垂れた手はしづが刻まれている。

何年も会わぬうちに、この親代わりの女神官はずいぶんと年老いたように見える。

「どうしてですか？ 彼女は罪人です。多くの人々を殺してきたのですよ。処刑されて当然だと思いますが」

「それはわかっています」

クロフはためらいがちに答える。

女神官は少し疲れたように、長い息を吐き出した。

「どうしてあなたはそこまで彼女にこだわるのですか？ 太陽の女神様の神託のためですか？ それとも他に理由があるのですか？」

「それは」

クロフは口元にしながら、言葉を探すように何度も繰り返した。

「それは、ぼくが彼女に助けられたからでは無いでしょうか？ 彼女は確かに、大勢の人を殺しましたし、妖しげな術を使う魔女とも言われています。農地を沼地に変え、多くの民を苦しめました。だから処刑される理由はぼくにも十分理解できます。でも、それではいけないんです。このままでは、何も解決しない。それは家に閉じこもり、じつと身を潜め、耳や目をふさいで、嵐が通り過ぎるのを待っているだけのような気がするんです。それでは駄目なんです。もしかしたら、この先同じことが起るかも知れない。上手く言えないけれど、何か、きっと何か、もっと別の方法があるはずなんです！」

女神官は疲れたように息を吐きだし、ふっくらと微笑んだ。

「あなたは変わりましたね。そろそろそういう時期なのかも知れません」

女神官はクロフにゆっくりと背を向けて、部屋の片隅にある木の箱に向かう。

箱の中に置いてあつた布包みを手に、クロフのいる炉ばたに戻ってきた。

「これを、持つて行きなさい」

クロフが手渡され布包みを紐解くと、中から一振りの剣と盾が現れた。

「これは」

クロフは件を取り、輝く刀身を鞘からわずかに引き抜く。

それはかつて南の王から『えられ、森の湖でヒーネとケーデインが失ったものだつた。

「彼が、ロキウスが森の討伐に行つたとき、持ち帰つたものです。王はほうびとして彼に与えたのだけれど、彼はそんなものはいらぬと言つて、わたしに押しつけたのです。これはあなたが持つて行きなさい」

クロフはロキウスの仏頂面を思い出して、苦笑いを浮かべる。

「どうして、これをぼくに？」

クロフは女神官の深いしわの刻まれた目元を見つめる。

「あら、だつてこの先、女の子を守つて旅を続けるのに、必要なものでしょ？」

女神官は笑みを浮かべ、こともなげに言い放つ。

顔からは冷たい雰囲気が消え、少女のような朗らかさが宿つている。

「今回の一件で、あなたが神殿に戻るべきではないとわかりました。あなたは今まで神々によく仕え、後輩の神官達に気を配り、神殿の雑事を一挙に引き受け、人々のためによく死んできてくれました。太陽の女神様の神託だつてそう。あなたは誰もがそつそつ出来るこトではないことをやり遂げたのですよ」

クロフは首をゆつくりと横に振る。

「でも、ぼくは彼女を救うことは出来なかつた。それに、森へ行く人々を思い止まらせることが出来なかつた。神託だつて、太陽の女神様のご期待には添えられなかつた」

女神官は節くれの手でそれを制す。

「まだ、諦めてしまには早いですよ。あなたは若いのですから、まだまだ様々なことが出来るはずです。諦めてしまえば、そこで終わりです。大切なのは自分で考えること。自分で考えて、あなたが少しでも後悔しないと思える方へ進みなさい。わたしが助けてあげられるのもここまでです。さあ、行きなさい」

白いものが混じつた長い髪を揺らし、女神官は優しげに微笑む。クロフは剣と盾の包まれた布包みをしっかりと胸に抱き、女神官に一礼して小走りに部屋を出て行く。

部屋を出る際際、クロフは女神官をわずかにかえりみた。

「ありがとう、義母さん」

幼い頃何度もそう言つてきたように、クロフは屈託のない笑顔で礼を述べた。

女神官が手を伸ばす前に、クロフの姿は足音を残して廊下の向こうに消えていった。

「太陽の女神ラナンよ。これで良かつたのですよね？」

女神官は両手で顔を覆い、涙を流し石の床の上にしゃがみこんだ。

救いの手

ディリーアはまどろみの中にいた。

横になり目を閉じると、地主の奴隸として働いていた頃の、貧しくても幸せな日々が思い出された。

父がいて、母がいて、兄や同じ奴隸の仲間がいる。

それだけで彼女はなにもいらなかつた。

それが彼女の世界のすべてだつた。

そして田を覚ますと、決まって虚しい気持ちに胸を苛まれた。

その日も同じだつた。

直前まで幸せな夢の中にいた彼女は、松明のはざめる音で田を覚ました。

夢はあぶくのようにはじけて消え、後ににはどうしようもない空虚な気持ちだけが取り残される。

ディリーアは起きあがり、何度か頭を振つて壁にもたれかかつた。光の差し込まない地下牢では、はつきりした時刻はわからない。

しかし牢番の兵士の巡回や交代を見れば、おおよその時刻はディリーアにも見当が付いた。

その日に限つて、牢番が昼過ぎから酒盛りを始め、ずっと今まで牢番が巡回や交代をしたことはなかつた。

そのためいまが夜のどれほどの時刻なのか、ディリーアには知ることが出来なかつた。

時間がわからなくとも、ディリーアは一刻一刻と自分の処刑の時が近づいているのは感じていた。

次に牢番が牢屋の前に立つときは、きっと自分が処刑される時だろつ。

ディリーアは石壁に背中を預けたまま、両膝を抱える。

悲しいような、苦しいような、胸の奥が鈍く痛む。

死ぬのが怖いと言つたら嘘になるが、クロフにあんなことを言つた手前、ディリーアは自分の死を前にして取り乱すようなことはしたくなかった。

森にいるときから、クロフと出会う以前から、奴隸として逃げ、追つ手を手にかけた時から、こうなることは予想が付いていた。自分の姿が大蛇に変わり、水の女神としての記憶が戻ったときから、ずっと人を殺す罪の意識に苛まれてきた。

もう人は殺したくない。生き物を傷つけたくない。

彼女の切実な思いとは裏腹に、森へ来る人間は後を絶たなかつた。大蛇になつたディリーアは、何とか人間達を森へ来ないよう説得しようとした。

だが、彼女の声は彼らに届かない。

言葉は通じても、彼らは大蛇が威嚇する鋭いうなり声にしか受け取らなかつたのだ。

彼女はいつしか絶望し、生き物すべてを憎むようになつていった。あるいは天上での月の神との一件が、彼女の心に影響を与えていたのかも知れない。

どちらにしても、彼女の水の女神としての力が災いし、森の木々は暗い木陰を作り、他の生き物を拒絶するかのように枝を生い茂らせ、周りの農地を沼地へと変えていった。

近くに住んでいた村の人々は土地を捨て、住み慣れた土地を後にした。

昔のような緑溢れ、羊や牛がのんびりと草をはむ光景は失われた。彼女はそれでもかまわないと思つていた。

それも仕方がないと思っていた。

そう、クロフと出会うまでは。

クロフは今までに森を訪れた人間達とは違つていた。

火の神の生まれ変わりであるからかも知れないが、ディリーアの命を奪うことなく、沼地を元のような豊かな土地に戻そうとしたの

だ。

「ディリーアは鏡のよつになめらかな湖面に空を映し、岸辺を見ながらクロフのことを考えるよつになつた。」

空行く渡り鳥を呼び止めては、クロフのよとをつぶやて尋ねるようになつた。

数日おきに森を訪ねてくるクロフと話し、美しい豎琴の調べを聞いているうちに、ディリーアの中にあつた凍てついた氷がゆっくりと溶けていつた。

何かクロフの手助けをしてやりたい。

いつしかディリーアは自然とそう思うよつになつていた。

ディリーアは自分の死を恐ろしく感じたが、それ以上に自分が生き長らえるよとによつて、クロフに迷惑がかかるよとが心苦しかつた。

自分が処刑されることによつて、クロフの立場が少しでも良くなれるのなら、この命も無駄ではないと思つことが出来た。

今のディリーアにはそれで十分だつた。

ディリーアは膝を抱えたまま、その中に顔を埋めた。

これでいい。これ以上のことは望んではいけない。

ディリーアは胸の奥からわき上がる感情を必死に押し戻した。堪えきれず、目頭に熱いものがこみ上げてくる。

逃げてはいけない。逃げれば、彼に咎が及ぶ。

ディリーアは地主の元から逃げ出すとき、兄の言葉を思い出した。奴隸達の中には、このまま地主のよとに留まつとする者達もいた。

その者達ははじめから諦めていた。

どうせ逃げ出せない。

捕まれば殺されるだけだと諦めていた。

兄はそんな者達を奮い立たせ、説得したのだ。

「このままよこに残つて死を選ぶか、新しい奴隸が入るのを待つか、おれならどちらの選択も選ばない。ほんのわずかな誇りを賭けて、

逃げ出すことを選ぶ。おれ達全員が生き残れなくとも、一人でも逃げのびる者がいて、無事に北の故郷にたどり着くことが出来たなら、仲間と共にあれ達の亡骸を葬ってくれるのなら、おれはここで死んでも悔いは無い」

両親が死んでから、奴隸達をまとめていた兄は、その話を終えた後、悲しそうな目をして彼女の頭を優しく撫でてくれたのを覚えている。

ディリーアがもつと早く水の女神の記憶が残つていれば、もつと早くその力に気付いていれば、このよつな最悪な事態は起こらなかつたかも知れない。

しかしすべては遅すぎたのだ。

ディリーアは声を殺して泣いた。

昔の感傷に浸つて泣くななど見苦しいとは思つたが、きっと処刑の日に国民の衆目にさらされれば、涙の一滴も出てはこないだろ。そのためだらうか。

ディリーアは牢屋の前に立つた人影にすぐには気付かなかつた。

「泣いているのですか？」

突然上から投げかけられた声に、ディリーアは驚いて顔を上げた。

救いの手⑨

牢屋の鉄格子を挟んで、布包みを抱えたクロフが松明の明かりに照らされ立っていた。

ディリーアは慌てて涙をぬぐい、顔を背けた。

「な、何でもない」

ディリーアは精一杯強がって見せる。

しかしそれも今となつては無意味なことのようと思えた。

クロフは少しだけ微笑んで、真剣な顔つきに戻る。

「少し鉄格子から離れていて下さい」

クロフは布包みの紐を解き、中から一振りの剣と盾を取りだした。

「何をする気だ？」

ディリーアは眉をひそめる。

「今からこの鉄格子を斬ります。大丈夫、この剣があればそんなことは造作もないはずです」

「だから、何をする気だ！」

ディリーアは鉄格子にしがみつく。

クロフは少し困ったように、ディリーアから刀を背ける。

「今からあなたを助けてます」

ディリーアは自分の耳を疑つた。

気が動転していたせいで、自分が聞き間違えたとさえ思ったほどだ。

「助ける？ お前は何を言つているんだ？」

ディリーアは何度もまばたきを繰り返し、クロフを仰ぎ見る。

「今はゆっくり説明している暇はないんです。どうか鉄格子から離れていてください」

クロフは鞘から剣を抜き放ち、刀身を横に構える。

肩でゅっくりと呼吸し、それに応じるように剣の刀身から炎に似

た赤い光が漏れ出す。

クロフの赤金色の瞳も、髪も、炭火が燃えるように徐々に赤みを増していく。

鋭いかけ声と共に、クロフは剣を横になぎ払った。

返す力でもう一度斬りつける。

すると剣で触れた鉄格子が、焼けた石のような赤い塊になつて床に飛び散った。

赤い鉄片は石の床に落ちる前に、黒い塊になつて辺りに散らばった。

クロフは剣を鞘に収め、鉄格子の切れた隙間から体を曲げて牢の中に入る。

牢の奥で座り込んでいるディリーラと目線を同じくする。

「よかつた。どこにも怪我はないですね。正直、上手くできるかどうか心配だつたんです」

ようやく正気に戻つたディリーラは、クロフに近くから顔をのぞき込まれているのに気が付いて慌てて顔を背ける。

「さあ、早く逃げましょ。今の物音でいつ牢番が駆けつけてくるとも限りません」

クロフはディリーラの手をつかみ、引っ張った。

「何だと？」

ディリーラはクロフの手を振り払う。

「逃げる？ お前はわたしを逃がすために、わざわざ牢までやってきたというのか？」

クロフはディリーラの冷たく青い瞳にもひるまず、大きくなづいた。

「ええ、そうです」

クロフはしゃがみ込み、ディリーラをのぞき込む。

「以前に言いましたよね？ ぼくはあなたを救いたいと。あなたが生き残るために、今夜しか逃げ出す機会はないんですよ」

クロフはディリーラに手を差し出した。

ディリーアはじつとその手を見つめていた。

「何故、お前はわたしを助けようとする？　わたしを助けて、お前にどんな利益があるというんだ？」

クロフは差し出した手を引っ込めて、自分の手の平を見つめる。「それは、ぼくがそうしたいと思うから。そうしなくては、いずれ後悔すると思うから。本当はあなたを守りきれる自信は無いんです。もしかしたらここに逃げることによって、あなたをもつと苦しい目に合わせてしまうかも知れない。辛い目に合わせてしまうかも知れない。でも、どうせ生きるなら自分の望むように生きたいし、あなたにも自由に生きて欲しいと思う。後悔は少しでも少ない方がいい。少なくともぼくはそういう想いです」

照れくさそうにクロフは頭をかいた。

「答えになつていないかも知れませんが」

クロフはもう一度ディリーアに手を差し出した。

「わたしは」

ディリーアはクロフの手を見つめ、自分の傷だらけの手を見つめた。

「わたしは、お前の足手まといにだけはなりたくないと思った。ここで命尽き果てるというのなら、それでもかまわないと思った。だが、こうして手を差し出されたら、やはり命が惜しくなるものらしい。不思議なものだな」

幼い頃、兄に差し出された手を取つたときのようだ、ディリーアはクロフの手に自分の手を重ねた。

その先にどんな苦しみや悲しみが待ち受けているか、ディリーアは今度こそ心がくじけ、巨大な白蛇になることは無いと感じていた。

城壁に白い月がかかり、館を見下ろすように闇夜を照らし出している。

月には霞がかかり、月は虹色の燐光をまとい光り輝いている。月明かりの照らし出す中庭に出たクロフは、木陰に立つ幾人かの人影に立ち止まつた。

人影は青白い光に照らされた草地を、一ちらへとゆっくりと近づいてくる。

クロフはティリーラを背中にかばい、持つていた盾を体の前に構える。

クロフは剣の柄を握りしめ、いつでも剣を引き抜けるように身構えた。

人影との距離があと数十歩というところで、突然彼らが声を上げ走り寄つてきた。

「ああ、やつぱりそうでしたか」

クロフは聞いたことのある声に警戒を解き、構えていた盾を下ろす。

白く輝く草地の上に立ち並んでいたのは、見知つた男達の顔だつた。

「お兄ちゃん！」

小さな人影が彼らを追い越し、クロフの前に走り出た。

人影はクロフと共にこの一年の間土地を耕した五人の奴隸達だった。

少年はクロフの足にしがみつき、顔を上げる。

「よかつた。お兄ちゃんが助かつて。ぼく、太陽の女神様に一生懸命お祈りしたんだよ。お兄ちゃんが、助かりますようについて」

顔を上げた少年は、クロフの後ろにいるティリーアに気がつき、目を丸くした。

「あれ、お姉ちゃんも一緒になの？」

少年は不思議そうに首を傾げる。

「いらっしゃ、お一人をあまり困らせるんじゃない」

追いついてきた体格のいい男が少年の肩をつかみ、クロフの足から引き離す。

男の後ろから、奴隸達が次々と歩いてくる。

「皆さん、どうしてここへ？」

クロフは奴隸達を見回し、驚きの声を上げる。

体格のいい男はくすぐつたそうに頭の後ろをかいた。

「族長が、あなた方に一言別れの挨拶がしたいと言つもので」

体格のいい男は後ろから歩いてくる老人を振り返った。

腰の曲がった老人は白いひげを撫でながら、一人を仰ぎ見た。

「この夜が、あんた達と会うことが出来る最後の夜だと思ってな。もしわしが同じような境遇なら、逃げ出す時は大きな祝祭のある前日、こんな月夜だと思ってな。あんた達を待つておったんじやよ」老人は昔を懐かしむように目を細めた。

「またまた、族長つたら、そんなこと言つて。現役を引退するのは、北の国に戻り、引き継ぎの儀式をしてからにしてください」

若い男が軽口を叩く。

「こら、よけいなこと話すんじゃないの」

中年の女が肘でつつぐ。

体格のいい男はぱつが悪そうに頭をかいた。

「まあ、気にしないでください」

老人は快活に歯を見せて笑う。

「ははは、かまわんじゃう。いやいや、あんた達一人を見ていると、わしらも他人事のように思えなくつての。わしも若い頃は戦場を駆け巡り、南の国の奴らをあつと言わせたもんじや」

老人は白くなつた眉の下から、鋭い目でティリーアの顔を伺う。

「お嬢さん、あんたは北の国に出だらう？ 恐らくあんたの父親はわしらと同じ、戦場で捕虜となつた兵士じゃろう。可哀想にな。あんたが南の国の奴らに復讐しておつたのは、大方仲間達の弔いのためじやろうに」「

老人は白いひげを節くれの指でしごく。

ディリーアは青い瞳でじっと老人を見つめている。

「族長」

辺りを油断なく見回していた体格のいい男が、小声で老人に耳打ちした。

「そうだな、あまり一人をお引き留めしても悪い。それにそろそろ辺りが騒がしくなつてきだしたしのう。全く、ゆっくり別れの挨拶もできんとは」

老人は名残惜しそうに一人を見上げる。

「わしらはあんたの残した土地を耕す仕事があるしのう。その仕事はフィエルナ姫が引き継いで、やつてくれるそうじや。そのためまだしばらく北へは戻れそうもない。もし北へ行く機会があつたら、子供達にそう伝えておいてくれんかの？ わしらは南で元気にやつていると」

老人はクロフを見て、歯を見せてにっこりと笑う。

深いしわに刻まれた顔に、少年のような朗らかさが宿る。

「わかりました。伝えておきます」

クロフが赤金色の瞳で見返す。

老人は満足したように何度もうなずいた。

「さあ、早く行ってください」

体格のいい男が二人の背中を押す。

「じゃあね。元気でね、お兄ちゃん」

「お気をつけ」

奴隸達に見送られ、クロフとディリーアは中庭の草地を走り去った。

奴隸達はいつまでも一人を見送り、手を振っていた。

月明かりに照らされた屋根付きの回廊を走り抜けている間、クロフはどうしようも無い不安が胸の奥にわだかまつっていた。

クロフはしきりに回廊の暗闇、茂みや下草の暗がりに目を落とす。

「おかしい」

クロフは走りながらぽつりとつぶやく。

春の祝祭を目前に控えているとはいえ、今までに警備の兵士誰一人ともすれ違わない。

それをクロフは不審に思つたのだ。

背後を走るディリーアも、先ほど奴隸達とのやり取り以来、ずっと黙り込んだままだ。

建物の影を曲がり、庭を通り抜ければ裏門にたどり着くと言つとこで、クロフはその答えを知つた。

裏門につながる小道のあちこちには、かがり火を焚いた警備の兵士達が大勢集まっている。

ゆうに百人はいる兵士を前に、クロフは苦笑いを浮かべ、背後に立つディリーアを振り返つた。

ディリーアは暗い面持ちで両手を胸の前で固く握りしめている。

おもむろに顔を上げ、青く悲しげな瞳でクロフを見つめた。

「昔な、小さな奴隸の女の子がいたんだ。その女の子は、優しい両親や兄や仲間達に囲まれて、貧しくても幸せだった」

「何を」

クロフは言いかけたが、ディリーアの暗い表情に遮られた。

「ある時、女の子は仲間達と一緒に森へ逃げることにした。しかし多くの奴隸は殺され、兄も女の子の目の前で殺されてしまった。女の子は心を壊し、以来醜い化け物となつて、人を襲うようになった」

ディリーアは目を伏せ、寂しげに笑う。

「と、途中まではどこの昔話にもありそうな話だな。この後王子様

が現れて、その化け物を倒し、見事王女様と結ばれれば完璧だな

おもむろにクロフの肩に手を置いて、ディリーアは顔を伏せた。

「あの老人との約束、忘れるなよ」

クロフはディリーアの言葉の意味を瞬時に判断した。

「何を考えている？　まさか自分の首を彼らに差し出しに行くわけじゃないだろうな？」

ディリーアはうつむいたまま、つぶやく。

「さあな。だが、わたしの死によつて彼らの心が癒えるのなら、何かが変わるのなら、それはそれで意味のあることかも知れない」

「違う！」

クロフは大声で言い放つ。

「それは違う。彼らは何も変わらない。それではただの無駄死にだ！」

クロフはディリーアの両肩をつかみ、激しく揺さぶった。

「ぼくはずっと見てきたんだ。民衆を導き、神々の教えを説くはずの神官達だって、田先の利益しか考えていない。彼らは自分の利益のために、ぼくと母を引き離し、殺したんだ！」

クロフの顔は怒りのために紅潮し、赤金色の瞳には怒りの炎が宿つている。

「くそっ！」

クロフはディリーアから、建物の壁を殴る。

ディリーアはそんなクロフを見て、うつむいたまま黙り込んでいた。

自分とは違つた境遇で育ち、悩み苦しんでいるこの若者に、どんな慰めの言葉をかけてあげればいいのか思いつかなかつた。

口から最初に出てきたのは、ディリーアが思つてもみない一言だつた。

「危ない！」

ディリーアがクロフを突き飛ばすのと同時に、田の前で白刃がきらめいた。

数瞬遅れて、ディリーラの胸元を槍の一閃がひらめいた。

ディリーラはさつと身をひるがえし、炎が燃えさかる焚き火の方へ走つていく。

その後ろを槍を手にした数人の兵士が追いかけていく。クロフはディリーラに突き飛ばされた姿勢のまま、建物の石壁にもたれかかっていた。

兵士達はクロフなど眼中にないかのように、少女の小さな背を追つて走つていく。

「くそっ！」

遠ざかっていくディリーラの背を追いかけ、クロフは駆け出す。

「風よ。わが身に宿れ」

口の中でつぶやく。

兵士達との距離をわずか一瞬で縮め、彼らの頭上を軽々と飛び越える。

クロフはディリーラの背に必死に手を伸ばす。

その髪に指が触れるといつとこりで、彼の背後から風切り音が響いてきた。

クロフはとつさに身を低くし、それをやり過ごした。

彼の頭上を風にも似た何かが通り過ぎていった。

振り返ると勝ち誇ったように笑みを浮かべる一人の兵士と目がつた。

「うつ！」

女の低いうめき声に、クロフは視線を前に戻す。

前を走るディリーラの背からは細い白銀の槍が、夜空に向かって

真っ直ぐ伸びている。

ディリーラの体は前のめりに倒れ、動かない。

クロフはディリーラのそばに駆け寄り、背中の槍を引き抜く。

うつぶせに倒れたディリーラの肩がかすかに動き、口元からは小さなうめきが漏れている。

救いの手ー2

クロフは手早く傷口に布を巻き付けると、ティリーラの腕に手をかけた。

「おい、見ろよ。おれの槍が魔女に当たったんだぞ」「クロフの背後から兵士達の叫び声が近づいてくる。

兵士達の先頭を歩く男が、腕を大きく振り上げわめき散らしている。

「わかった、わかった。今回はお前の手柄にしどいてやるよ。ただし、後で酒をおごれよな」

かがり火の焚かれている広場のちょうど中央。

クロフは四方を見回し、兵士達に取り囲まれていることを見て取つた。

兵士達はそこで初めてクロフに気が付いたかのように足を止める。かがり火のそばにいた兵士達も、槍を手に一人の周りを瞬く間に取り囲む。

「魔女め。一度ならず、一度までも、神官様をたぶらかすとは」

兵士の叫びに、クロフがそちらに顔を向ける。

すると兵士達の間をかき分けて、見知った人物が歩いてきた。

「やはりな」

白い衣を揺らし、ロキウスはクロフに歩み寄る。

ロキウスは長い杖をクロフの眼前に突きつけ、静かな怒りのこもつた口調で尋ねる。

「何故、魔女の牢を開け、逃げるための手助けをした?」

クロフは黙つたまま、赤金色の瞳でロキウスを見上げる。

「氣でも狂つたか? それとも魔女にたぶらかされたのか? そのどちらもか。まあいい。その理由は 神殿に戻つてから、ゆっくり聞かせてもらおう」

ロキウスは手を一振りし、高らかに叫ぶ。

「一人を捕らえろ！」

槍の先が高い金属音をたて、武具の触れ合つ音が広場に響く。

兵士達の一人を取り囲む輪が徐々に小さくなる。

クロフは大きく息を吸い込み、剣の柄に手を伸ばした。

クロフは音もなく鞘から剣を引き抜くと、自分を取り囲んでいる

兵士の槍の穂先を振り払う。

わずかに金属の触れ合つ音がしただけだった。

それだけで槍の先は蜂蜜のように溶けて、根本から折れ地面に転がつた。

「動かないでください」

素早く立ち上がり、近くにいた兵士の一人に剣を突きつける。

「誰も、動かないでください」

クロフは自分を取り囲んでいる兵士を見回した。

「どうか、今回は見逃してもらえないのか？」

クロフは炎に照らされた兵士の顔を順番に見回し、白い衣を着たロキウスを見つめる。

ロキウスは眉を寄せ、怒りをあらわにする。

「どうしてそこまでその女のためにならへす。その女が一体お前に何をしてくれたというのだ」

クロフは寂しげに微笑んだ。

「本当に助けられていたのは、ぼくの方だったんです。ただ彼女が化け物になり、人間を憎むようになった理由が、ぼくにもほんの少しわかるんです」

兵士に突きつけた剣先が月明かりに白く光る。

「だからと言つて、魔女を逃す理由にはならん」

それはロキウスの発した言葉ではなかつた。

暗闇から響く声に、クロフは振り向いた。

「少ない手勢で、よく持ち堪えた」

ロキウスは頭を垂れ、道を譲つた。

数名の家臣を従えた南の王は長い衣を揺らしうつくりとクロフの

前まで歩いてくる。

城壁の上に数両の兵士が姿を現し、一斉に広場に向かつて『』を構える。

「春の祝祭の前とは言え、兵達を集めておいて正解だつたな
王はあいひげをさすりながら、クロフを直踏みするよつに眺め回す。

「王様の手を煩わせて申し訳ございません。今回の件はすべてこち
らの不手際でござります」

「ふむ」

南の王は槍の先を折られ戸惑つている兵士達を見回し、クロフへ
と田線を戻す。

「神官は皆良識のある方々であると想つていたが、あのよつな非常
識な輩もいるとは」

「申し訳ございません」

ロキウスは頭を下げる。

クロフは兵士に剣を突きつけたまま、南の王をじらみつけている。
「その責任、神殿の側で取つてもらいたいものだが。いかがかな?」

「はい、承知しております」

ロキウスは王の前に進み出て、クロフに杖を向ける。

「お前の命まで取るつもりはないが、少し頭を冷やせ。お前には休
息が必要なのだ。神殿に戻り、心身をゆつくつと休めるがいい」

ロキウスは杖の先をクロフに向け、朗々と詩を唱える。

「木々のざわめき 梢を渡る
獸の叫び 荒野を渡る

風は岩山を上り 木々をなぎ倒し

つむじ風を伴い 空へと駆け上がれ

ロキウスが高らかに詠い上げ、杖を天に掲げると、突如広場のか
がり火の炎が揺らめいた。

「ううう」と強い風がわき起こり、黒い雲が夜空の月を隠す。

クロフがまばたきをする間に、その体は強風にあおられ足が地面

を離れる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2311z/>

赤と青の神話 三章

2011年12月19日19時48分発行